

# 州都ヘルソン奪還成したウクライナ

拓殖大学非常勤講師  
伊藤嘉彦

いとう よしひこ 大東文化大学及び  
独イエーナ大学博士前期課程卒。拓殖  
大学大学院国際協力学研究科博士課程  
修了。博士（安全・保障）。

二月二四日に始まったロシア軍によるウクライナ侵攻以来、長らく守勢に回っていたウクライナ軍は、八月下旬からヘルソン州およびハルキウ州において本格的な反撃を開始した。この攻勢によりロシア軍はハルキウ州における占領地の大部分を失ったほか、ヘルソン州では州都ヘルソンから撤退するなど、戦線縮小を余儀なくされている。本稿では引き続き前号から一月中旬に至る戦況を概観する。

## 被占領地奪還進めたウクライナ

ヘルソン州付近のウクライナ軍は州都ヘルソンおよび主要なドニプロ川渡河地点の一つであるコザツィケに向けて進撃した。ウクライナ軍はドニプロ川にかかる橋を破壊し、ドニプロ川西岸地域に展開するロシア軍部隊への補給・増援に負担を強いたが、ロシア軍がこの地域を放棄してドニプロ川東岸に移動するのかが、ウクライナ側の判断は錯綜した。実際、ウクライナ国防省情報総局のブダノフ氏は一〇

月一九日、年末までのヘルソン州奪還をほのめかす発言をしていたが、二五日になってヘルソン市防衛のために新たなロシア軍が派遣されたと述べた。さらに二八日にはウクライナのゼレンスキー大統領が、ロシアがこの地域を放棄する兆候は確認できないと発言していた。しかしロシア軍は一月一日、ドニプロ川東岸地域への「配置転換」を発表し、部隊を東岸地域に移動。一四日にゼレンスキー大統領はヘルソン市に入り、州都奪還を宣言した。

他方、ハルキウ州東部でクピャンスク奪還に成功したウクライナ軍は、さらに東方のルハンシク州に進み、交通の要衝スバトヴェ近郊に迫った。またドネツク州では要衝リマンを奪還後、クレミンナ方面に向けてさらに東進したが、ここでロシア軍の抵抗に遭い、戦線は膠着状態に陥っている。ただ、ドネツ川を挟んで南に位置する部隊は、ピロホリフカまで進出しており、七月にロシア軍によって占領されたリシチャンシクから十数キロの地点まで到達した。

## 戦線の立て直し急ぐロシア

ロシアは九月二二日、予備役の部分的動員に踏み切り、三〇万人を招集。不足する兵員を補充し、戦線の立て直しを図った。ロシアのシヨイグ国防相は一〇月二八日、この動員令の完了を報告している。ウクライナ軍の攻勢により短期間にハルキウ州の占領地を大きく喪失したロシア軍だが、ルハンシク州の要衝スバトヴェおよびクレミンナ近郊ではウクライナ軍の攻撃をしのいだ。またドネツク州の都市バフムート、ソレダーおよびドネツク市北西ピスキー周辺地域では連日にわたり攻勢に出ている。さらにロシア軍は一一月六日に、ドネツク州のノヴォセリフカ・ドルハ付近とスパルタク付近からアウデイイフカを包囲するように攻撃したが、こちらはウクライナ軍を包囲・撤退させる形に持ち込めていない。

またドニプロ川西岸に位置するヘルソン市の保持は、ロシアにとって「特別軍事作戦」における政治的成功の一つであったが、ロシア軍上層部は軍事的観点から再評価を行い、ヘルソン市およびドニプロ川西岸地域の維持に固執せず戦線を縮小し、東岸地域に兵力を再配置して戦線を再構築する方針を打ち出している。

ロシアは一〇月一日、ウクライナの発電所といったインフラを狙ってミサイル攻撃を実施した。これは一〇月八日に発生したウクライナによるとされるクリミア大橋への破壊工作に対する報復と見られている。ロシアによるインフラを狙った攻撃が続くなか、ゼレンスキー大統領は一〇月二二日、ロシア軍がドニプロ川のダムを破壊し、下流域に洪水の被害をもたらそうとしていると述べた。一方でロシアのシヨイグ国防相は一〇月二三日、核汚染物質をまき散らす「汚い爆弾」を使用する兆候がウクライナ軍に見られると主張して、主要国にその危険性を訴えるなど、非難の応酬が続いている。

両国の険悪な関係は、和平交渉への駆け引きにも暗い影を落としている。プーチン大統領は九月三〇日に停戦交渉の用意があると述べたが、併合したウクライナの四州については議論の対象にはならないとした。これに対しゼレンスキー大統領は一〇月四日、プーチン大統領との停戦交渉は不可能とする法令に署名して応じ、さらに一一月八日には和平交渉の前提として失われた領土の回復などを挙げ、立場の違いを浮き彫りにした。これから冬を迎え戦闘は下火になるかもしれない。しかし一一月一五日ポーランドにミサイルが落下。和平交渉への道は混沌が続くだろう。●